

伊勢市長賞

「ひいばあばは、にん知症」



明野小学校 五年 村井 煌誠

むらい おうせい

ぼくのひいばあばは、にん知症でした。
ぼくのきおくの中では車いすに乗っていたり、手でささえられながら歩いたりしていました。あまりしやべったことがありませんでした。母が言うには、ぼくが赤ちゃんだったころは、ぬいぐるみを持ってきてくれたり、たくさんだっこをしてくれたり、あそびあいてをしてくれていたそうです。ぼくが、おぼえていることは、イオンにかけた時に車いすをおしたことです。その時にひいばあばは、「おうちゃんありがとう」と「ジュジュ」として、言うてくれました。それがぼくは、うれしくて会った時、車い

すをおす係りをしました。でも、車いすの人を見てじやまくさそうにする人。ゆびをさしてくる人。そう言う人を見ると、とてもかなしい気持ちになりました。ぎやくにエレベーターなどでゆずってくれたり、ボタンをおして待ってくれる人もたくさんいました。

ひいばあばは、いつの日かろう人しせつに入りました。会いにいくと、最初は、だれかわかってもらえず「しさみしかつたです。ばあばや母の名前は、でてこなかったけど、ぼくのかおをみて「おうちちゃん」とよわよわそうな声でよんでくれたのにはびっくりしました。だけど、ぼくだけの名前をおぼえてくれていたのはうれしかったです。かえろうとするとなみだをながして「いっしょにつれてって」と言いながらあとをつい

てきました。でもそれはだめなのでぼくも
さみしいけど、心をおににして「またくる
ね」とばいばいしました。

にん知症はきおくがなくなったり、もの
わすれをしたりします。よく聞くのが夜
「ごはんなどたべたのに、「ごはんは、まだか」
とすぐおきたことがわすれてしまう。

ぼくのひいばあばもそうでした。元気だっ
た時は、じょうだんを言って楽しそうにし
ていたのもうそれは、みれなくなっ
てしまったことは、ざんねんでした。

その日によってちょうしがよかったりわ
るかったりするけどひいばあばが「にこ
とわらうとかなしいきもちがとんでいっ
てうれしい気持ちになります。

ぼくはひいばあばをとおしていろいろなこ
とを学びました。しょうがいをもっている

からへんけんをもってはいけないこと、みんなとかかわらずおなじ人間なんだと言うことです。ぼくは、すこしでも手だすけができる人間になりたいと思っています。あと、しょうがいをもっている人がもつと生活しやすい世の中になればいいなと思います。

伊勢市議会会議長賞



「認知症キッズサポーターになって」

厚生小学校 六年 平松 心海

ひらまつ

こころみ

私は、認知症キッズサポーター養成講座に友だちと行ってきました。そこではお年よりや認知症の人への接し方などを学びました。認知症のことは知っていましたが接し方しだいで進行がおそくなるということは初めて知りました。認知症は一度なったら治らない、と思っていました。実際は治りはしないけど、進行はおそくなると思いました。

講座では『ご飯まだかね』という劇を見ました。ご飯を食べたのに食べたことを忘れてしまつて聞いてくるのです。「食べたよ!!」と怒つてというと認知症の方は悲し

い気持ちになつてしまいます。そこで何かを『一緒に』しようと言うのが良いそうです。確かに私もお母さんとかに「危ないからやったらダメ!!。」とキツく言われたらイヤだけど「また一緒にやるな。」と言われてたらうれしくなります。こんな風に接していけたらなと思います。

講座を受けて思い出したのは数年前に、お年よりのお手伝いをしたことです。登校中に、おばあさんがゴミを出していました。ゴミを出すと杖を落としてしまいました。その方は拾うのが難しいようでした。その杖を拾って渡しました。ほんの小さなお手伝いです。だけど私の心は、お手伝いできたうれしさでいっぱいでした。

私にもおばあちゃんがいます。もしも、

そのおばあちゃんが認知症になったら間違えたことをしたり言ったりしていても、ゆっくりじゅっくり、優しく接したいと思います。自分のおばあちゃんじゃなくても、困っていたら前から優しくおどろかせないように、声をかけたいと思います。

認知症の方にも私と同じように感情があります。だんだん色々なことを忘れてしまうだけです。誰だって認知症になることはあるんだから、自分がされてうれしいことを認知症の方にもしていききたいです。

伊勢市教育長賞

「やさしい町を目指して」



明野小学校 五年 稲垣 早笑

いながき

さえ

ピンポンパーンポーン、今日も広報
いせのチャイムが鳴った。朝早くでも、夜
でも時間は関係ない。その音が鳴ると母
ちゃんは「シー」と私たちをだまらせてま
どを開けて聞きます。「何やった?」と私
が聞くと、「また行方不明やわ」と答えた。
私は大人なのになんでまいごになるのか
な?と思った。母ちゃんに聞くと「にん知
しようの高い者やからかな」と言った。
私はにん知しようが何か分からなかったの
で、学校のタブレットで調べてみました。に
ん知しようは脳の障害でものを忘れがひど
くなって今まで出来ていた事が出来なく

なるそうです。85才以上の4人に1人いて、自分の居場所が分からなくなったり自分の行きたい場所が分からなくなったり、日常生活が今までのようにおくれなくなるようです。だからまいごになったんだと思います。それと心配して探している家族や、し設の人がいることも知りました。私の周りのおじいちゃんおばあちゃんは、とても元気で、たぶんにん知しようの人はいません。だから広報でお知らせがあつて、おじいちゃんおばあちゃんを見かけても何も思いませんでした。でも、もしかしたら自分の家が分からなくなつてまいごになつているかもしれない。これからはそう思つて少し様子を見てみようと思ひます。

私は、この作文を書くうと思つたからに

ん知しようのことを知れたし、知らない友達にも教えられます。これから、高いい化社会でどんどんお年よりの増えるので、行方不明の広報ももっと増えるかもしれません。でもそうやってお知らせすること、地いきの人が注意して見て行って、みんなが安心してくらせる町になればいいなと思います。

伊勢地区医師会長賞



「アルツハイマーびょうこの本を読んで」

はなおか あさひ

小俣小学校 二年 花岡 旭緋

ぼくは、アルツハイマーびょうこの本を知るために、図書かんで本を十二さつ読みました。本を読んでぼくがさいしよに思ったのは、ぼくがおじいちゃんになった時に、アルツハイマーびょうこになったらどうしよう、でした。なぜなら、このびょうこになると、じ分も家ぞくも大へんなことになると思ったからです。たとえば、じ分のすんでいる家の場しよがわからなくなったり、じ分のさいふをなくした時に家ぞくに、「ドロボー。」と言ってしまったたり、このびょうこを知らない人に、からかわれてつらい思いをすることもしれないからです。

つぎに思ったのは、もしぼくのおじいちゃんがアルツハイマーびょうになつてしまつたら、ぼくには何ができるだろうか、でした。本を読んで、ぼくにもできそうだと思いますのは、なくしたものをさがしてあげること、ブロックで一しよにあそぶこと、みじかな人の名前を書いたノートをプレゼントすることの、三つでした。今はまだアルツハイマーびょうをなおすくすりはありませんせんが、びょう気がすすむのをおくらせるくすりはあると書いてあつたので、そのくすりもすすめたいと思います。ぼくにできることをして、おじいちゃんによりそいたいのです。

さいごに、ぼくが読んだ十二巻の中で一ばんおすすめの本は「おもいではチヨコレートのにおい」です。この本は、お話しも

おもしろいし、お話しの後にくわしくアルツハイマーびょうびょうについて書いてあって、しやしんもあります。ぼくは、おかあさんにすすめられて読んでみたけど、とてもわかりやすく書いてあるので、まだアルツハイマーびょうびょうのことを知らない人に読んでみてほしいです。図書かんには、ぼくが読んだ十二さついがいにも、アルツハイマーびょうの本があるので、かん字が読めるようになつたら、ほかの本も読んでみようと思います。

伊勢志摩区域連携型

認知症疾患医療センター長賞

「奮闘するたすく」を読んで」



小俣小学校 五年 佐藤 里菜

私がこの本を読もうと思ったきっかけは、
高齢者のことを知りたいと思ったからです。

ある日、主人公の佑は認知症のおじい
ちやんをデイサービスに連れていくこと
になりました。学校の先生から佑と友達
の一平にデイサービスでのことを自由研
究としてレポートするように言われます。
認知症というのは物忘れがひどくなっ
たり、言うことがおかしくなったりす
る病気のことです。実際に佑のおじい
ちやんのおかしな行動や発言には驚くこ

とが多くありました。デイサービスに行くことに嫌がるおじいちゃんやそこで働く人たちの様子、ケアを受けている人たちの思いなど大変さを知ることができました。佑のおじいちゃんが「わしはどうしてこんなになってしまったのか」と言う場面が印象的でした。自分がおかしのことが分かり悲しみにくれているところは胸をつかまれたような苦しく辛い気持ちになりました。私はもつと知りたいと思い「認知症キッズサポーター養成講座」に参加しました。病院の先生がお年寄りについて分かりやすいように色々なアニメの人物に例えて教えてくれました。認知症はだれでもなってしまうかもしれない怖い病気だと知りました。認知症になると本当の心の状態とは違い心が取られたようになってしまふそうです。また、お年寄りは耳が

聞こえにくくなりテレビの音をすごく大きくしてしまったり、大きな声で怒ったりしてしまうそうです。老化から色んな支障が出てくるので周りにいる私たちがきちんと理解をして接していかなければならないと学びました。

私にはおじいちゃんとおばあちゃんがいます。私が生まれてから色んなことを教えてくれて世話をしてくれています。しかし、最近は何気なく体の色んな所を痛がったりすぐに疲れてしまったりして寝ていることが増えました。私が「だいじょうぶ」と声をかけると「いかなあ。体がいうことをきかん」と言っています。年をとり今までできたことがだんだんとできなくなっているようです。今までたくさんの愛情を注いであげた大好きなおじいちゃんとおば

あちゃんに長生きしてもらいたいです。少しでも手助けができればと思っています。私は将来、人の役に立つ仕事がしたいです。この本の中で人の役に立つことは目標を達成した時のうれしさとは違い心の底からあつたまる感じと話しています。確かにテストで良い点数を取った時のうれしさと人から感謝された時のうれしさは違います。心に響く感じがあります。しかし、人の役に立つ仕事って自己満足になることもあります。恩義せがましい介護をしてはいけないともありました。その点にも注意したいと思いました。この本と講座から、高齢者や認知症について多くのことを学び体験することができました。このことを生活に活かして思いやりをもって、できることから取り組んでいこうと思います。

伊勢市立伊勢図書館長賞



「ぼくのできるじゅ」

なかむら

はるひ

豊浜東小学校 一年 中村 晴陽

ぼくはおじいちゃんとおばあちゃんとい
っしょいでいます。がじうからかえり
てくるじうもおじいちゃんとおばあちゃ
んが「おかえり」といってくれます。とても
うれいです。

ぼくのおじいちゃんは、とてもやさしい
です。ぼくが「けてけがをすると、すぐに
ばんそうじうをはって、はやくなお
るじうにおまじないをしてくれます。そ
うすると、はやくなおります。おじいちゃ
んがおまじないをしてくるとあんしん
します。

ぼくのおばあちゃんは、とてもはたらき
ものです。やさいをつくるのがじょうずで
す。ぼくたちのためにいつもおいしいやさ
いをそだててくれます。おばあちゃん
のやさいはとてもおいしいです。おばあち
やんのつくったやさいをたべるとげんきが
でます。

ぼくは、おじいちゃんとおばあちゃんが
だいすきです。ふたりともげんきだけど、
おじいちゃんは80さい、おばあちゃんは75
さいです。いつもふたりがげんきでながい
きしてほしいです。

でも、しんぱいなことがあります。コロナ
ウイルスです。おかあさんからじょうれいし
やのひとがコロナウイルスにかかるとしんで
しまうことがあるとききました。ぼくは、
とんでもなくなりました。だから、おじい

ちゃん、おばあちゃんをまもるためにかえつてきたらすぐにてをあらいます。ごはんはしずかにたべます。マスクをわすれないようにつけます。ぼくがびょうきにならないように、おじいちゃんおばあちゃんがびょうきにならないように、ぼくにできることをがんばります。みんなのいのちをまもりたいからがんばっています。「コロナウイルスがいなくなつて、かぞくみんなでおでかけができるひまで、ぼくもがんばります。」

伊勢市立小俣図書館長賞

「ずっとずっと家族だよ」

進修小学校

四年

朝日

寧音

あさひ

ねね



「あんたはどこのかわいこちゃんや。」
これは、わたしの大ばあちゃんの口ぐせです。わたしの大ばあちゃんは、今年九十二才になりました。何回も何回も会っているのに、何回も何回も同じことをくりかえし聞いてきます。それが、わたしにはとても不思議でたまりませんでした。お母さんは、わたしに、「何回も同じことを聞かないで。」と注意するけれど、大ばあちゃんには、怒らずに笑って答えます。だから、わたしも少しあきれたように笑いながら、同じ質問に答えています。でも、

心の中では、「さつきも、言ったのに。もう
わすれちゃったのかな。」と思っていました。
ある日、大ばあちゃんが会った帰り道に、
妹とけんかになりました。久しぶりに会っ
た大ばあちゃんが、いつもは忘れていたわ
たしの名前を、「この日はおぼえていました。
でも妹の名前は思い出せませんでした。
私は、自分の名前を思い出してくれたこ
とが、とてもうれしくて、妹に自まんして
しまいました。妹は、忘れられてしまった
ことが悲しくて、私と言い合いになってし
まいました。そのときに、お母さんから、
大ばあちゃんが認知症であることを教えて
もらいました。認知症になる前は、赤ちゃ
んだったわたしのめんどうをたくさん見て
くれて、とてもかわいがってくれていたそ

うです。もし認知症になっていなければ、学校や友達の話がたくさんしたかったし、大ばあちゃんが作った料理も食べたかったです。

今は、それはできないけど、わたしは、大ばあちゃんが大好きです。名前も忘れていることが多いし、「どこのかわい子ちゃんや。」と家族であることすら忘れてしまっていることもあるけれど、会うと、いつもうれしそうにににに笑ってくれて、温かい気持ちになるからです。まわりにはおばあちゃんやお母さんも、何度も同じ話をくり返しながら笑って話している光景も好きです。

認知症だと知ってからは、大ばあちゃんがわたしや妹の名前を思い出せなくて「

まっつてしまう前に、「ねねだよ。」と名前を先に言うことにしました。そして、何度も何度も笑って答えています。もうあきれたように答えることはなくなりました。覚えていたかどうかで、妹とけんかになることもありません。

最近、会えない日が続いていますが、ずっとずっと笑っていてほしいです。